

このマーク(複十字)は、
世界共通の結核予防運動の
旗印です。

No.
426
2026.1

結核・肺疾患予防のための **複十字**

アジアと
世界の結核を
なくさなければ
日本の結核は
なくなる

第56回UNION肺の健康世界会議（報告）



公益財団法人結核予防会

本誌は複十字シール募金の
収益により作られています
<https://www.jatahq.org>

WORLD CONFERENCE ON LUNG HEALTH 第56回肺の健康世界会議

第28回秩父宮妃記念結核予防功労賞世界賞授賞式

令和7年11月18日～21日にデンマークのコペンハーゲンで第56回肺の健康世界会議が開催されました。そのなかで、第28回秩父宮妃記念結核予防功労賞世界賞の授与式が行われ、本会を代表して加藤誠也結核研究所所長よりキールタン デダ氏に表彰状を授与いたしました。



展示ブース出展

11月18日～21日にかけて、展示ブースを出展し当会の活動を紹介しました。来訪者の方々からは国際協力に関する相談や研修についての質問をいただきました。ブースで複十字シールを配布した他、スタッフが他団体ブースを訪れ情報収集を行いました。学会では専門家セッション、シンポジウムなどに参加し、舌スワブを用いた分子検査やAIを活用した結核診断など、新しい取り組みが紹介されていました。また、薬剤耐性結核の短期治療や、検出・管理の課題についても議論があり、参考となる知見が多く得られました。（ザンビア事務所 田中、ダッカ）



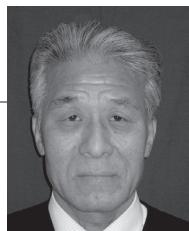
複十字シールコンテスト

世界各国の複十字シールが展示され、コンテストが開催されました。オンラインによる一般投票の結果、当会は3位に入賞しました。



公益財団法人愛媛県総合保健協会

理事長 仙波 匡彬



新年あけましておめでとうございます。

昨年は、気候変動が農業や経済に大きな影響を及ぼし、米不足をはじめとする食料問題が社会的課題として浮き彫りとなりました。持続可能な未来の為に、国際社会の一員としての意識を新たにするものであります。

そのような中、愛媛県としましては約60年ぶりに第77回結核予防全国大会が開催されます。

テーマは「昭和100年の歩み、愛媛から未来へ～正岡子規の精神を踏襲～」と決定しました。結核は古くから人々の健康を脅かしてきた病であり、近代日本においても多くの文学学者や芸術家がその影響を受けました。ここ愛媛県松山市に生まれた俳人・正岡子規もまた、結核に苦しみながらも、最後まで筆をとり続けた人物であります。彼の「病床六尺」に記された不屈の精神は、私たちに病に立ち向かう勇気を与えてくれま

す。子規の生涯は、結核の恐ろしさと同時に、人間の生きる力の尊さを私たちに教えてくれます。

わが国では、長年の努力により結核の罹患率は着実に減少してまいりました。しかしながら、依然として年間一万人を超える新規患者が発生しており、結核は「過去の病」ではなく、私たちが今なお取り組むべき現代の公衆衛生課題であります。子規が命を賭して示した「生きることへの執念」を胸に、私たちは結核予防の歩みをさらに進めていかねばなりません。

新しい年の始まりにあたり、ここ愛媛松山の地から全国へ、行政、医療機関、保健所、地域の皆さまが一体となり結核予防の輪を広げ、誰もが安心して暮らせる社会を築いていくことを誓い合いたいと思います。

本大会がその一歩となることを願い、関係者の皆様のご健勝とご活躍を祈念して、年頭のご挨拶といたします。🎍

Contents

■メッセージ

年頭のご挨拶

仙波匡彬…… 1

■新春ご挨拶 2026

年頭のご挨拶

尾身茂…… 2

令和8年新春にあたって

三好康子…… 3

令和8年新春を迎えて

若林芳典…… 3

■第56回肺の健康世界会議

第28回秩父宮妃記念結核予防功労賞授賞式、ブース出典、
複十字シールコンテスト

……表2

結核治療の転換点に立ち会って—UNION2025 から見えた
国際的課題と新たな潮流

吉田志緒美…… 4

■第84回日本公衆衛生学会総会

第84回日本公衆衛生学会総会に参加して

平尾晋…… 6

第84回日本公衆衛生学会総会 自由集会に参加して

下川佳華…… 7

第84回日本公衆衛生学会総会—日本公衆衛生学会、

日本結核・非結核性抗酸菌症学会共同企画—「飛び出せ

日本一途上國の公衆衛生と結核対策」

岡田耕輔…… 8

■結核対策活動紹介

外国出生者の結核対策における監理団体への取り組みについて
新江菜苗…… 10

■教育の頁

肺外結核の診断・治療上の留意点
児玉達哉…… 12

■世界の結核研究の動向 (50)

第9回抗酸菌研究会をふりかえって
和田崇之…… 14

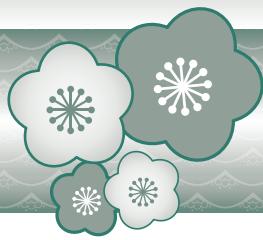
■予防会だより・シールだより

第77回結核予防全国大会開催要領
「複十字」掲載主要論文・記事一覧
……17

2025年沖縄県結核予防婦人連絡協議会と沖縄県の活動
……18

結核予防会海外事務所から Happy New Year 2026

～世界結核デー記念～国際結核セミナー・令和7年度結核対策
推進会議（お知らせ）



新春ご挨拶 2026

年頭のご挨拶



結核予防会

理事長 尾身 茂

新年あけましておめでとうございます。

昨年は、アメリカがWHO脱退を表明し、世界の結核ならびに感染症対策に大きな空白が生じました。

特に、途上国では結核に関する人材不足や資金調達難が生じ、加えて治療薬・検査キットなどの必要な物資の需給バランスが崩れ、対策実施において困難な状況が続きました。しかし、厚生労働省、外務省、WHO、JICA、本会全国都道府県支部、全国結核予防婦人団体連絡協議会、日本ビーシージー製造株式会社、第一生命保険株式会社をはじめ、関係各位から温かいご支援を賜り、無事に本会の国際協力事業を進めることができました。心より感謝申し上げます。

昨年の本会活動を振り返ると、取り巻く環境は一層厳しさを増しています。このため、結核研究所では、そのあり方について、2024年から複数回にわたり、外部委員を交えて深く議論し、その成果を報告書として昨年取りまとめました。現在、この報告書を基に、各部でアクションプランの再構築を進めております。また、厚生労働省にも報告し、理解を求めております。

さらに、病院経営、ITの活用、財源確保など、さまざまな課題について当会全体で検討と対応を進めています。

本年も重要な行事が数々予定されています。結核予防全国大会については、3月17日、18日の二日間で開催予定です。通常開催形式に戻し、「昭和100年の歩み、愛媛から未来へ～正岡子規の精神を踏襲～」をテーマに、愛媛県松山市で開催いたします。多くの方のご来場を期待しております。

結核予防会職員一同、本年もなお一層新たな課題に果敢に挑戦してまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。竜



旧年中は機関誌「複十字」をご愛読いただき、厚く御礼申し上げます。本年も多くの方々に結核対策に関わる様々な情報を届けできるよう努めてまいります。新しい一年が皆様にとって、幸多き一年となりますようにお祈り申し上げます。本年もより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

機関誌「複十字」編集担当一同



令和8年新春にあたって



愛媛県結核予防連合婦人会

会長 三好 康子

新年あけましておめでとうございます。

本年度は愛媛県で第77回結核予防全国大会が令和8年3月17日、18日に開催されます。私にとって初めての全国大会の地元開催となりますので、不安な気持ちが大きいですが、皆様と共に有意義な会となりますよう努めて参りたい所存でございます。

かつて「国民病」と呼ばれた結核は、長年にわたる皆様の献身的な努力と、公衆衛生活動の積み重ねによって大きく減少しました。しかしながら、現在も年間1万人の新たな患者が発生しており、依然として私たちの身近な感染症の一つです。特に高齢化の進展により、結核は地域の健康課題として新たな形で私たち

の前に現れており、世界に目を向ければ、毎年1,080万人が発症し、たくさんの命が失われています。結核は「過去の病気」ではなく、「今も共に向き合うべき病気」です。日本が長年培ってきた経験を、国内外の結核対策にいかしていくことが、私たちの使命です。早期発見・早期治療を進め、結核根絶のためには、医療機関や保健所だけでなく、私たち婦人会（女性会）が行っている複十字シール運動を中心とした、啓発・支援の輪を一層広め、誰もが安心して暮らせる地域づくりを目指してまいりましょう。

終わりに、本大会が実りあるものになりますよう祈念し、新年の挨拶とさせていただきます。鳴き声

令和8年新春を迎えて



結核予防会事業協議会会長

山口県予防保健協会

専務理事 若林 芳典

新年明けましておめでとうございます。

丙午の年を迎える、火の勢いのごとく活気あふれる一年となることを願い、皆様の御健勝と御発展を心よりお祈り申し上げます。

さて、近年、我々医療・健診業界を取り巻く環境は大きな変化を遂げています。新型コロナウイルス感染症の流行を機に健康へのニーズが高まる中、結核・呼吸器感染症対策において重要な役割を担う健診については、受診者の安心と安全を最優先に、より質の高いサービスや利便性を追求する動きが広がっています。それに呼応するかのようにDXは加速し、その動きは新たな局面を迎えていきます。

新しい健康社会の実現に向けて、AIによる画像診断支援やクラウドを活用したデータ連携、オンライン

予約・問診の拡充など、デジタル技術の活用が急速に拡大しています。健康を支える健診は今や人々の暮らしを支える基盤であり、その価値を高めるためにはDXは必要不可欠になっています。

こうした中、結核予防会事業協議会は本年4月に15周年を迎えます。これまで活動を支えてくださった関係者の皆様に心から敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます。

節目を迎えるに当たり、結核・呼吸器感染症予防をはじめとする関連事業については、押し寄せるDXの波を的確に捉え、本部・支部の更なる連携強化を図り、医療・健診業界の新たな発展に寄与してまいります。

本年も変わらぬ御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げ、新年の御挨拶といたします。鳴き声

結核治療の転換点に立ち会って— UNION2025 から見えた国際的課題と新たな潮流

結核研究所抗酸菌部

主任研究員 吉田 志緒美

2025年11月18日から21日にかけて、国際結核肺疾患予防連合が主催する「第56回肺の健康世界会議(UNION World Conference on Lung Health 2025)」が、デンマークのコペンハーゲンにおいて開催されました。世界の結核対策が大きな転換点を迎える中、本会議は、科学的発表だけでなく、政策、患者支援、診断・治療の実装をめぐる議論が例年以上に充実しており、結核研究に携わる者として多くの示唆を得ることができました。特に今年は、「治療レジメンの最適化」と「脆弱集団へのアプローチ」が本会議の大きな柱の一つとして掲げられ、私自身の発表内容と密接に関連していました。

■薬剤耐性結核治療レジメンの最前線：短期化と安全性のバランス

今回のUNIONでは、新規抗結核薬剤・ホスト指向療法(Host-directed therapy: HDT)を含む“次世代治療法の開発”がテーマのセッションが設けられ、将来的な治療短縮や毒性軽減に向けた前臨床・早期臨床段階の報告が注目を集めました。薬剤耐性結核(DR-TB)の治療期間が大幅に縮まる点は、患者負担の軽減だけでなく、治療離脱の減少にも寄与すると期待されています。一方で、国によっては、薬剤供給の不安定、副作用モニタリング体制の不足、耐性化を監視する検査リソースの不足、といった課題が依然存在し、短期化レジメンの普及には慎重なステップが必要です。特に、ベダキリン[BDQ]とクロファジミン[CFZ]は短期レジメンの中心薬剤であるため、これらに対する耐性(AMR)の監視体制をより強固にする必要があることが強調されました。耐性出現を早期に把握し、適切に介入する体制の整備も不可欠であり、私の研究テーマとも重なる部分でした。

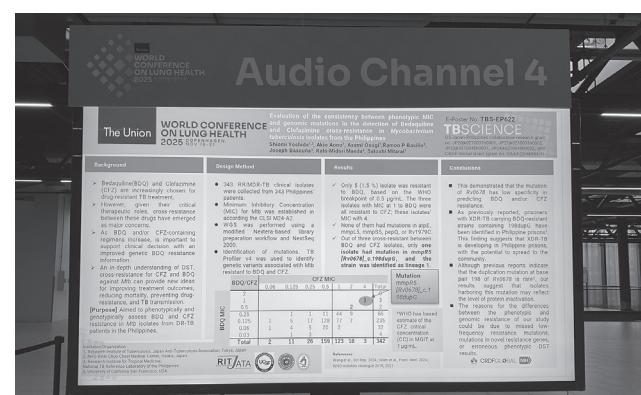
■資源の乏しい地域で直面する“矛盾”

一方で、世界の議論を聞きながら、資源が限られた地域での結核診療の“矛盾”を強く感じました。国際的には「多剤耐性結核の迅速スクリーニング」から、「多数薬剤に対応する迅速耐性予測技術(ターゲット

NGS)」への転換が推進されつつあるものの、多くの低・中所得国では、依然として培養検査の実施すら困難であり、薬剤感受性試験(DST)とゲノム変異の突合ができません。会場でも結核高まん延国であるアフリカやアジアから参加した研究者からは、人的・財政的資源の不足を訴える声が相次いでいました。再燃か再感染かの正確な判断や、DR-TB治療の最適化が求められるにもかかわらず、肝心の基盤となる検査体制が整っていない現実は、治療の高度化を進める一方で、より「使いやすく、標準化された迅速耐性検査」が必要であることを浮き彫りにしています。

■TBサイエンスの潮流：表現型とゲノムをつなぐ研究の重要性

今回の私の発表「Evaluation of the consistency between phenotypic MIC and genomic mutations in the detection of Bedaquiline and Clofazimine cross-resistance in *Mycobacterium tuberculosis* isolates from the Philippines」では、フィリピン、米国との共同研究のもと、薬剤耐性結核(DR-TB)患者由来の結核菌株を対象に、BDQ/CFZの表現型MIC(薬剤感受性試験)と、既知の耐性遺伝子変異の整合性を評価した研究について報告しました。BDQ/CFZは世界的に「表現型と遺伝子型が一致しない」問題が指摘されています。本研究でも、BDQ耐性を示す5株のうち、既知のRv0678変異を保有していたのは1株のみであり、残りの複数株は“耐性があるのに既知の遺伝子変異が見つからない”という、国際的にも重要な課題(ターゲット



筆者によるポスター発表

ゲットゲノム耐性予測の見落としの可能性)を裏付ける結果となりました。これは「既存のターゲット領域だけでは耐性を説明できない可能性」を示すもので、ウェブ上で発表を閲覧した参加者から「低頻度変異の見落としなのか、未知の遺伝子座が関与するのか」といった質問を受け、議論を取り交わしました。耐性予測技術の精度向上が、今後のDR-TB診療に不可欠であることを再認識させられるセッションとなりました。

■ 小児・妊婦の MDR/RR-TB：脆弱な集団への導入が進む「短期・全経口レジメン」

今年のUNIONで特に印象的だったのは、妊婦・小児・思春期の多剤耐性結核（MDR）およびリファンピシン耐性結核（RR-TB）患者を対象にした短期・全経口レジメンの実装経験が、世界各国から報告されたことでした。これらの集団はこれまで新規薬剤の臨床試験から除外されやすく、安全性データも不十分であったため、治療選択が大きな課題でした。しかし近年、BEAT Tuberculosis や EndTB などの臨床試験の結果を受け、WHOは6か月・全経口の短期レジメン（BDQ、デラマニド [DLM]、リネゾリド [LZD] に、レボフロキサシン [LFX] またはCFZを組み合わせたレジメン）、ならびにBDQ、LZD、ピラジナミド (PZA) を基盤とし、第三世代フルオロキノロン（LFXまたはMFX（モキシフロキサシン））やDLMを組み合わせた9か月レジメンを、妊婦や小児にも使用可能とする新たな推奨を示しました。会場では、パプアニューギニア・南アフリカ・ペルーなど、実際にこれらのレジメンを導入した国の取り組みが紹介され、小児用分散錠（dispersible formulation）の入手、モニタリング体制、薬剤供給、医療者不足など、各国が直面する現実的な問題が率直に語られました。このように、妊婦・小児への治療短期化は「誰ひとり取り残さない」結核対策の象徴とも言える一方で、耐性情報を迅速に把握する診断基盤が不十分な地域では、短期レジメンを安全に導入すること自体が難しいという課題も浮き彫りになりました。妊婦・小児の結核治療においても、正確かつ迅速な耐性診断が治療成功の鍵となるという点では成人と同じであり、その重要性はより大きいと感じました。

●妊婦・小児TBの特殊性

妊婦では、薬物動態の変化に加えて胎児への安全性データが十分でない薬剤があることから、薬剤選択に



コペンハーゲンの街並み

第 56 回肺の健康世界
会議会場



は慎重な判断が求められます。特にMDR/RR-TB 治療に用いられる薬剤の中には、妊娠中の使用経験が限られているものもあり、既知の安全性が比較的確立している薬剤を優先しつつ、母体の重症度と治療効果を踏まえて慎重に投与する必要があります。加えて、小児は体重変化が速いことや、栄養不良やアドヒアランスの点から投与量調整が難しいなど、治療上の課題は多岐にわたります。最近は子ども向け分散錠の普及により、味や服薬コンプライアンスが改善し、短期レジメン導入の後押しとなっています。一方で、治療を継続するための支援体制が依然として不可欠である点は変わりません。

■ おわりに

今年のUNIONでは、診断技術、治療レジメン、脆弱集団支援、それらを支える政策や資源といった多層的な議論に触れることができ、多くの出会いを得ることができました。特に、薬剤耐性の解釈における表現型とゲノムの不一致問題は、国際的に共有される課題です。私の研究がその解決の一助となるよう、今後も研鑽を積んでいきたいと考えています。同時に、培養検査すら難しい地域で「高度な個別化治療」が求められる現状には、大きなギャップを感じざるを得ません。だからこそ、使いやすく正確な迅速耐性検査が世界中に普及することが、結核制圧の鍵になると強く思いました。本会議で得た知見と国際的ネットワークを糧に、日本からも科学的根拠に基づく情報発信を続け、すべての患者に適切な治療が届く未来に向けて努力していきたいと思います。今回の参加に際しご支援いただいた皆さんに深く感謝申し上げます。次回はブラジル・リオデジャネイロでの開催予定です。まだ参加されたことのない方にも、ぜひこの貴重な経験をおすすめしたいと思います。蜜蜂

第84回日本公衆衛生学会総会に参加して

結核研究所対策支援部
企画・医学科長 平尾 晋

2025年10月29日（水）～31日（金）に、静岡県静岡市にあります静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」で開催された第84回日本公衆衛生学会総会に参加しました。最寄り駅は、東海道本線の静岡駅より1駅隣の東静岡駅でした。そのお陰か、駅の近くに高い建物が殆どないため駅舎から富士山を望むことができました。それに加えて、駅舎から会場へ向かうために降りていく階段からも望むことができ、会場へ向かう間に2度ほど立ち止まることになってしまいました。

最近の多くの学会は後日配信されるようになっており、会場参加と後日配信とに分けて聴講することが出来て便利な時代となっています。筆者は後日配信が無いものを中心に会場で聴講しております。しかしその反面、後日配信はいつでも見られると思っていても、学会から帰って日常業務に戻りますと、忙しさから後回しになり、配信終了直前に慌てて聴講する、あるいは時間切れで見たいものを全て見ることが出来ないということを繰り返しております。今回も今までと同様に、執筆時点ではまだ後日配信にまでたどり着けていませんので、後日配信の無い一般演題の報告のみさせてもらいますことをご容赦願います。尚、結核集団発生の対策に関する自由集会は他稿を一読願います。

結核に関しては、今年のシンポジウムは例年より多かった印象があります。一般演題も、一時期は感染症の枠は新型コロナウイルス感染症が多くなり、結核の演題が少なくなっている印象を持っていましたが、少しずつ数が増えている印象となっています。

内容として多く見られましたものとして、外国出生者や分子疫学関係、保健所管内の結核患者数の増加の考察などがありました。

印象に残っているものとしまして、「O-12-01-3 大阪府コッホ現象事例動向調査の報告」がありました。ツベルクリン反応は通常は接種後2週間以内に実施とさ

れていますが、この研究結果では、7日以内に行うことが改めて推奨されていました。

最近のトピックス的なものとしまして、退院基準を少し緩和する議論が出てきており「O-12-02-4 全国保健所長を対象とした結核隔離入院に関する意識調査（2024）」がありました。結核入院制度の意義を肯定的に捉えている者が過半数を占めた半面、感染拡大防止の公益確保と入院患者の自由制限とのバランスを制度面で見直す必要が有るとの認知も過半数の者が持っていたという報告がありました。

上記とは系統が異なるものとしまして、「PA-15-03-2 地域医療実習での行政医療職による授業の報告—学生の行政キャリア認識に着目して」というものがありました。公衆衛生医師の不足が課題ですので、医学生に対するキャリア啓発の活動報告がされていました。結核対策を例に感染症対応の業務内容を説明し、行政医師のやりがいや職務の意義を伝え、アンケート結果から、これまで接点のなかった行政医療職と交流し、そのキャリアや実務内容を具体的に認識することができたとありました。

最後ですが筆者は、所属している対策支援部が行っています帰国時結核治療支援で帰国しました29例のインドネシア人の背景因子やインドネシアでの受診状況を英語で発表しました。患者の約17%は受診の情報が得られず、国境を越えた紹介の困難さと、これを可能な限り最小限に抑える必要があることを伝えました。



駅舎から撮影



駅舎からズームで撮影

第84回日本公衆衛生学会総会 自由集会に参加して



北九州市保健福祉局保健所保健予防課
感染症保健係係員 下川 佳華

2025年10月29日（水）から31日（金）にかけて、第84回日本公衆衛生学会総会が静岡県静岡市にて開催されました。「結核集団発生の対策に関する自由集会」は初日に開催され、参加者は、会場61名、オンラインでは221アクセスがありました。

まず、代表世話人の結核研究所加藤誠也所長による開会の挨拶では、結核集団発生は引き続き取り組むべき課題であり、特に外国出生者における受診の遅れ等の課題を解決するためには、言語障壁に立ち向かうべきであると強調されました。

今回、本市の事例を含む2事例が発表され、いずれも外国出生者を発端とするものでした。1例目は、川崎市保健所保健医療政策部の眞川幸治様から「専門学校における学生の結核集団感染事例」について発表がありました。同じ専門学校に在学していた学生から肺結核患者2名が発見されましたが、明らかな接点は判明しなかったことから、学生の行動範囲や校内の換気システム等考えられる感染機会について丁寧に調査・考察されていました。また、初発患者は長期間咳が出ていたにも関わらず結核の診断が遅れたことに加え、ステロイド薬投与が増悪因子となり病状が進行してしまったことを受け、医師会や医療機関への啓発を行わっていました。再発防止のため、関係機関へフィードバックすることの重要性について改めて認識しました。事例発表後には、参加者から「硬化陰影が認められる場合は、生検をして活動性でないことを確認することが重要」というコメントもあり、特に外国出生者で陰影指摘あり、呼吸器症状ありといった事例では、まず肺結核を疑うべきことが共有されました。

2例目は、私が「北九州市における外国人留学生の結核対策に関する考察」について発表させていただきました。本市における集団発生事例では、同時期に高感染性の肺結核患者が複数名発生し、初発患者が不明な中での対応に苦慮しましたが、全ゲノム解析の実施

により感染伝播の流れが明らかとなりました。加藤所長からも、結核研究所における全ゲノム解析の実施とさらなる普及への期待について共有されました。本事例から見えた課題としては、学校健診や有症状時の受診の遅れ、学校との連携に苦戦したこと、治療中断や受診の無断キャンセル等多々ありました。一方で、教員と顔の見える関係を築くことで学校の協力を得られるようになったことや、学生に合わせて様々なDOTSを組み合わせた服薬支援により全員治療完遂できたこと等成功例もあり、両方を踏まえ今後の対策を見直すきっかけとなった事例でした。

2事例の報告を通して、外国出生者は母国で感染・発病して入国し、受診や診断の遅れによって病状が進行し、学校という密な空間で感染拡大する恐れがあることが示唆されました。阿蘇保健所の斎藤所長の講評では、外国出生者の対応における職員の技術向上の必要性について言及されました。また、静岡県感染症管理センターの後藤センター長の閉会挨拶では、同時期に複数名の発病者が発見された背景には、学ぶために来日している留学生を労働等で過酷な状況に置いてしまっている可能性があることや、外国人に限らず不幸な結核を生まないよう対策を行っていくべきであることを言及されました。今後は発生後の対応だけでなく、平時から早期発見に尽力し、感染拡大防止対策に力を入れていきたいとより強く思え、身の引き締まるものとなりました。

最後に、本市における結核集団発生対応方針の決定や全ゲノム解析の実施にあたり多大なるお力添えをいただきました結核研究所の先生方をはじめとし、このような貴重な経験をさせていただいたことにつきまして、全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。鳴き声

第84回日本公衆衛生学会総会—日本公衆衛生学会、日本結核・非結核性抗酸菌症学会共同企画—「飛び出せ日本—途上国の公衆衛生と結核対策」

結核予防会
国際部長 岡田 耕輔

1. はじめに

令和7年10月29日～30日、静岡市にて開催された第84回日本公衆衛生学会総会において、日本公衆衛生学会、日本結核・非結核性抗酸菌症学会の共同企画として、シンポジウム：飛び出せ日本－途上国の公衆衛生と結核対策を開催した。例年、結核研究所により結核集団感染等をテーマとした自由集会が開催されているが、結核予防会が公募企画としてこのようなシンポジウムを開催するのは初めてである。その目的は、日本の公衆衛生に従事する医療職にもっと国際保健、特に結核対策に関心を持ってもらい、国際分野における新たな人材発掘につなげることである。シンポジウムは東京都板橋区保健所長・長嶺路子氏、結核予防会副理事長・前田秀雄氏を座長のもと、次に述べる4名の演者の発表、および指定発言から構成された。その後の会場における質疑応答も、終了時間一杯まで活発に行われた。

2. 「結核対策をめぐるグローバルスタンダードとのギャップ—駆け出し感染症医が各国のフィールドで学んだこと」結核予防会国際部・永田由佳氏

永田氏は、途上国での活動経験を交えながら、自分の医師としてのキャリアパスへの考え、感染症医として途上国の結核対策に関わることの意義などについて説明をされた。カンボジアの結核有病率調査を通して明らかとなった積極的患者発見の重要性、ネパールにおける新技術AI-CAD (Artificial Intelligence-based Computer-Aided Detection) を用いた住民健診の紹介、日本では未だ導入されていない多剤耐性結核の短期6か月治療のミャンマーでの拡大、タイにおける全ゲノムシーケンスの活用、そしてケニアのTB/HIV患者診断における尿中LAM (lipoarabinomannan) 検査の導入などを紹介し、途上国では日本の標準を超える新技术が実際の結核対策に活用されていることを報告した。さらに、国家結核対策プログラムや社会的コンテクストを踏まえた対策の重要性に気づかされたこと、



右より、座長の長嶺氏、前田氏、永田氏、井上氏、町田氏、小野崎氏

臨床医として日本では稀な症例を豊富に経験できたことなどに触れながら、「結核高まん延国における結核対策を強化しなくては、日本の結核は終わらない」ことを実感したと述べた。

3. 「ウズベキスタンで考えたこと—国際協力経験の還元」東京都荒川区保健所・井上守江氏

井上氏は自身がJICA海外協力隊に参加したウズベキスタンの経験を通して、当時の葛藤や気づかされたこと、学んだこと、現在の業務への還元などについて、具体的な事例を交えながら説明した。活動地域はウズベキスタン西部のカラカルパクスタン自治共和国で、停電などの厳しい環境の中、言葉の問題や文化の違いに苦しみながら過ごした2年間を振り返った。当初の半年間は現地の同僚たちとのコミュニケーションに苦しんだが、やがて、その同僚たちとの共同作業を通じて、環境や文化の異なる相手の考え方への理解が進んだこと、日本とは異なる厳しい環境の中では病気の予防や対処が困難な人々が存在していることに気づかされたことなどを話した。現在では、それらの経験から、「物事を様々な角度から捉える多角的な視点」、「相手がやる気になるまで待ち、来るべき時に備える準備の重要性」、そして「目の前にいる相手を尊敬する大切さ」を心にとめて業務に向かっているとのことであった。

4. 「国際保健のキャリアパスーこれから海外に出たい人を後押しするためには」前国際保健医療科学院公衆衛生政策研究部長・町田宗仁氏

大学の英語英文科を中退し、医師の道に進んだ後、厚生労働省、県型保健所などの行政経験を有する一方で、大学教員、JICA専門家、WHO医務官を経験されるなど、特異で多分野でのキャリアを積まれた町田氏ならではのお話を伺うことができた。少子化とは言え海外業務に関心のある若者は一定数存在しているが、国際協力に関するメッセージを反復継続して自分たちは発信してきたのか、どのようなキャリアパスがあり得るのか若者に説明できるかといった自問から話が始まった。町田氏は大学勤務時代に実施した国際保健人材の育成に関する研究結果を取り上げながら、医療職や理学部卒業生におけるキャリアパスの具体例を紹介し、医療職以外（経済、政治、環境・工学など）の分野においても国際保健が必要とする人材ニーズがあると話された。グローバルヘルスの時代においては、先進国から途上国への一方向の支援ではなく、互いがそれぞれの分野で学び取ることができる双方向性がますます重要になることを指摘し、日本の地域保健と国際保健の両方を行き来できる人材が求められていると訴えた。

5. 「私と感染症の歴史ーWHOでの経験を通して」結核予防会理事長・尾身茂氏

尾身氏は20年間におけるWHOでの業務、特に、ポリオ、SARS（Severe Acute Respiratory Syndrome）の対策の経験を通して、感染症対策および国を動かす公衆衛生の魅力、遣り甲斐についてビデオでの登壇となった。パンデミックを引き起こすのは呼吸器感染症であり、スペイン風邪では5千万人の命が奪われた。新型コロナウイルス感染症では3年間で約700万の人命が失われたが、結核を取り上げれば、同時期の1年間だけで160万人が亡くなっている。結核は言わば、「慢性的なパンデミック」の状態にある。WHOでは西太平洋地域におけるポリオ根絶に取り組み、これに成功した。SARS対策では、香港、広東省にWHOで初めて渡航延期勧告を発出することにより、中国に調査団を送り込むことに成功した。現在、米国がWHOか

らの脱退を宣言しているが、今こそ日本の人材の活躍が望まれている。そのためには、日本国内の公衆衛生従事者が海外で活躍すること、そして、海外の経験を生かした人材が日本の公衆衛生で活躍することが期待されている。感染症に国境はないと同じく、公衆性に国境はないと力強く述べられた。

6. 指定発言、および討論

フロアからの指定発言として、結核予防会の小野崎郁史氏がご自身のJICA専門家およびWHO医務官としての豊富な国際保健の経験から、途上国における結核対策、国際保健の魅力について語られた。カンボジアの有病率調査を世界に拡大させることで、無症候性結核の認知拡大、WHOによる結核罹患者数の上方修正などに貢献できた。これだけ多くの患者が発生している結核対策に関わることの遣り甲斐は非常に大きい。若い人にはまずは現場に飛び込み、見て、感じ、考えていただきたい。その中から、自分の進むべき道が見えてくるだろう。公衆衛生修士の取得や国際機関でのインターン経験なども自分の進路を決めるのに役立つ。年配の先生方には、若者に活動の機会を与え、それを支援する環境を提供して欲しいと話された。

その後の質疑応答では、「帰国を前提にする必要性は特になく、そのまま国際機関で長期にわたり活躍している日本人も多くいるのでその支援策を検討すべき」、「感染症専門家人材の派遣を組織的に支えるべきでは」などの意見が出された。こうした討論を通じて、海外と国内の現場がつながっていると実感できる環境をつくることが、若い人たちの国際協力への意欲を後押しできるのではないかとの座長の言葉で結びとなつた。予定された時間だけではなく、もっと会場とのやり取りが期待されたが、次のプログラムも差し迫っておりやむを得ず議論を打ち切ることとなつた。

座長をお引き受けいただいた先生方、貴重な経験をお話しいただいた演者の先生方、フロア発言、質疑応答にて会場を盛り上げていただいた先生方に心より感謝を申し上げます。



栃木県県南健康福祉センター（県南保健所）
健康対策課 主任 新江 菜苗

【はじめに】

栃木県県南健康福祉センター（県南保健所）は、管内人口470,108人と県全体の約4分の1を占め、外国人が多い地域であることが特徴である。また、管内の新登録結核患者に占める外国出生者の割合は全国と比較して高く、外国人技能実習生の患者が多数発生している。技能実習生が結核を発病した場合、言葉の障壁、社会的孤立、医療的課題、経済的課題等、様々な困難を抱えるケースが散見され、対応に課題を感じていた。外国人技能実習制度は監理団体という非営利団体が技能実習生と実習実施者との間における雇用関係成立の斡旋及び実習実施者に対する監理事業を行っており、今回は監理団体に対する取り組みを実施したので報告する。

【目的】

- 技能実習生の対応の課題を明らかにするため、監理団体における技能実習生の対応についての実態調査を行う。
- 監理団体に対して結核の普及啓発を行い、結核の早期発見、差別・偏見の防止を図る。

【対象と方法】

管内の監理団体16か所（外国人技能実習生機構OTITホームページから抽出）に対し、訪問または郵送でアプローチした。

【実施内容】

1. 実態調査内容

- 監理団体の概要（技能実習生の在籍人数や国籍）
- 監理している実習実施者の所在地
- 結核患者対応や結核接触者対応の経験の有無
- 技能実習生の健康診断の結果把握状況
- 技能実習生が体調不良時に実施している支援内容
- 結核に関する知識

2. 普及啓発

リーフレット（表1）を配布し、結核の「感染経路」

「感染と発病の違い」「感染性について」「健診の重要性」「まん延国と管内の状況」について、説明を実施した。また、実習実施者に対して、リーフレットの配付及び普及啓発を依頼した。

【結果】

1. 実態調査

実態調査を依頼した16団体のうち13団体から回答があった。（回答率:81%）

（1）監理団体の概要

在籍している技能実習生の数について、6名と少ない団体から400名と多い団体があった。技能実習生の国籍は、ベトナム、インドネシア、カンボジアの順に多かった。

（2）監理している実習実施者の所在地

監理している実習実施者の所在地について「県内

外国人労働者を雇用する事業主の皆さまへ ～結核を正しく知って健康的な職場づくりを～ 結核に注意しましょう

日本に滞在する外国出生者の結核が増えています

結核は過去の病気ではなく、今でも日本では年間1万人以上が発病しており、結核を発病した人の約1割が外国出生者です。入国後早期に発病する場合が多いですが、ある程度経ってから発病することもあります。

※ 栃木県内は年間100人以上が発病、うち、外国出生者が約2割。

早期発見で感染の拡がりを防止しましょう

- 雇い入れ時健康診断は早めに行いましょう。
- 定期健康診断（胸部エックス線検査）を実施しましょう。
- 健康診断で要精密判定であれば、受診勧奨を積極的に行いましょう。
- 体調が悪い場合は、上司などへ報告するよう事前に伝えておきましょう。

このような症状があるときは結核の可能性があります 早めに医療機関の受診を勧めてください

- タンのからむ咳や発熱などの風邪のような症状が2週間以上続く
- 食欲がない、体重が減る
- 疲れやすい
- 微熱が続く
- 顔色が悪い
- 近頃、寝汗をかく



「結核＝仕事ができない」ではありません

- 医療の進歩により、結核の治療方法は確立されており、結核と診断されても、複数の薬を6か月から9か月間毎日きちんと飲めば治ります。
- 早期であれば就労しながら通院治療ができます。

人権への配慮を忘れずに

- 文化や生活習慣の違いに配慮し、本人に寄り添った支援をしましょう。

表1. 「外国人労働者を雇用する事業主の皆様向けリーフレット（栃木県感染症対策課作成）」

のみ」と回答したのは3団体（23%）で、「県外のみ」と回答したのは1団体（8%）であった。「県内・県外どちらも」と回答したのは9団体（69%）であった。

（3）結核患者や接触者の対応経験

技能実習生が入国後に結核を発病したことが「ある」と回答したのは6団体（46%）、「ない」と回答したのは7団体（54%）であった。また、技能実習生が入国後に結核患者の接触者となったことが「ある」と回答したのは4団体（31%）、「ない」と回答したのは9団体（69%）であった。

（4）技能実習生の健康診断の結果把握状況

入国前健診と定期健診については、全ての団体で結果を把握しており、雇い入れ時健診については、11団体（84%）で結果を把握していた。

（5）技能実習生が体調不良時に実施している支援内容

技能実習生が体調不良時、全ての団体で通院時の送迎を実施していた。また、相談対応や受診予約、通訳の支援、処方薬や医療保険の説明についても多くの団体が行っていた（表2）。

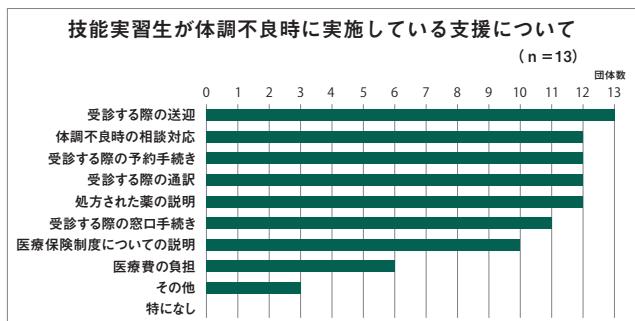


表2

（6）結核に関する知識

「空気感染」を知っていると回答したのは11団体（85%）、「治療をすれば治る病気」を知っていると回答したのは10団体（77%）であった。一方で、「感染性がある場合とない場合がある」を知っていると回答したのは4団体（31%）のみであり、また、「感染と発病が異なる」を知っていると回答した団体は7団体（54%）であった（表3）。

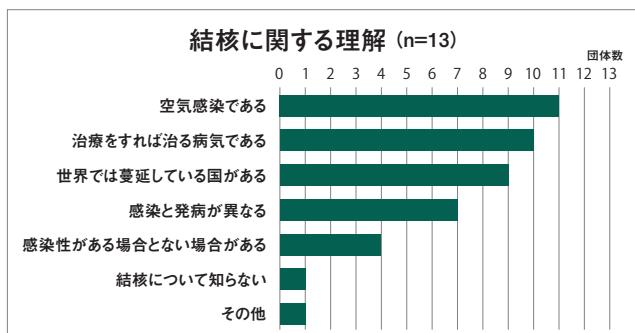


表3

2.普及啓発

訪問で普及啓発した際の監理団体の反応について「感染性が無い場合があることを知らなかった」「感染と発病の違いについて知らなかった」という声があった。その他「保健所が作成した資料があると実習実施者に普及啓発を実施しやすい」や「保健所に相談できることがわかった」という声もあった。

【考察】

1.監理団体について

調査では、監理団体が高い割合で技能実習生の健康診断の結果把握を行い、また、体調不良時に手厚い支援を実施していることが把握できた。監理団体は、技能実習生の健康支援の中心的役割を担っており、日頃から実習実施者への監理業務のなかで、実習実施者へ普及啓発も可能であることから、外国人結核対策における重要な機関であると考える。

2.監理団体の結核の理解について

調査では「感染性がある場合とない場合がある」と「感染と発病が異なる」についての理解が「空気感染である」と比較し低いことがわかった。技能実習生が結核を発病した際、監理団体の結核の理解が、不当な対応の予防や差別・偏見の防止につながると考えることから、「感染性がある場合とない場合がある」「感染と発病が異なる」という結核の特徴について理解を促していく必要がある。

3.保健所の役割について

監理団体が結核患者発生時対応に困らないよう、日頃から顔の見える関係づくりを行い、有事の際の円滑な連携につなげることは保健所の重要な役割である。

【まとめ】

今回の取り組みを通じて、技能実習生や監理団体についての深い理解につながり、また、普及啓発の課題やターゲット層を明らかにすることができた。今後は、監理団体とのつながりを活かして実習実施者への取り組みを展開し、地域のネットワーク構築、ひいてはまん延防止につなげていきたい。



参考文献

- 1) 栃木県,毎月人口調査（令和6年1月1日現在）
- 2) 栃木県,外国人住民数現況調査（令和6年12月31日現在）
- 3) 結核研究所,結核指標値
- 4) 厚生労働省,外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護に関する法律
- 5) 出入国在留管理庁,令和2年度在留外国人に対する基礎調査報告書

肺外結核の診断・治療上の留意点

複十字病院

呼吸器センター 児玉 達哉

一般的に、結核症においては、結核菌を含むバイオエアロゾル粒子を吸入することによって、肺で感染が成立するが、いくつかの経路を経て肺以外の全身の様々な部位でも感染が成立する。結核予防法（平成19年廃止）では、肺外結核を「肺あるいは気管支結核以外の臓器を主要罹患臓器とする結核症及び粟粒結核」と定義している。つまり、肺結核と肺外結核が合併する場合は肺結核に分類され、粟粒結核（多量の結核菌が短期間に、あるいは繰り返し血流に入り、全身に散布性病変が形成されるもの）は肺病変の有無を問わず肺外結核となる。ただし、肺結核と併発していても、他臓器に結核病変がある場合には、その臓器特有の障害が生じる可能性があるため、実臨床においては、肺結核とは異なる治療管理の必要性に留意しなければならない。

「結核の統計（2025年）」によると、2024年に報告された上記定義の肺外結核症は2,595例である。肺結核合併例も臓器別の罹患臓器として集計されている4,114例の肺外結核のうち、最も多いのは結核性胸膜炎1,883例（46%）で、全体の約半数を占める。次いで、肺門・縦隔以外のリンパ節結核640例（16%）、粟粒結核530例（13%）、腸結核159例（4%）、結核性腹膜炎140例（3%）、脊椎結核113例（3%）、結核性髄膜炎93例（2%）と続く。

その感染経路としては、血行性（粟粒結核・結核性髄膜炎など）、管行性（腸結核・咽頭結核・喉頭結核など）、リンパ行性（結核性胸膜炎・頸部リンパ節結核など）、隣接臓器への直接波及（結核性脊椎炎から腸腰筋結核膿瘍など）が主なものとして挙げられる。

肺外結核の感染性に関しては、全国の保健所から結核研究所へ問い合わせがしばしば寄せられるため、判断を迷うことが多いようである。基本的に、喀痰抗酸菌塗抹陰性の肺外結核例では、感染性はないと言える。

しかしながら、肺外結核患者の剖検や、膿瘍の洗浄に代表されるような手技の過程で、空中に放出された結核菌を含むエアロゾル粒子を吸入することで感染を引き起こしたと考えられる例もある。頸部リンパ節結核に対する生検手技中に、穿刺針による針刺しを契機として皮膚結核を発症した特異な例の報告もある。感染予防としては（活動性肺結核を合併しない場合）、スタンダードプリコーションを基本として、エアロゾル粒子発生を伴う手技の場合はN-95マスクの装着が必須である。

肺外結核の中で特に留意しなければならないのは、粟粒結核、結核性髄膜炎や脳結核腫などの中枢神経結核である。粟粒結核については初感染後の全身散布に大きく二つの経路（①早期まん延型、②晚期まん延型）が知られている。①では、初期変化群として肺門リンパ節→縦隔リンパ節→静脈角リンパ節に結核菌が進展し、静脈角リンパ節から内頸靜脈と鎖骨下靜脈の合流部に侵入、全身に播種する。一方、②では、初感染後、ある程度時間が経過した後に、慢性孤立性臓器結核（肺、腎、骨、リンパ節、性腺などの結核）の結核病巣の毛細血管や細静脈が侵され同部位から結核菌が血流に侵入し、血行性に全身に播種する。現代日本の結核患者の特徴として、高齢者が多いのはもちろんのこと、外国出生の若年患者が増えているため、双方のまん延型の粟粒結核に遭遇する（高齢者の場合は晚期まん延型、若年患者の場合は早期まん延型）。問題となるのはその確定診断だが、粟粒結核では呼吸器症状に乏しく、発熱や食欲不振、倦怠感など非特異的な症状が一般的であるため、診断に難渋する場合がある。

結核症診断の基本は、菌を細菌学的に証明することである。しかしながら、粟粒結核による微細な散布像の場合は、喀痰からの排菌はむしろ少ないと多く、確定診断が難しい。また、肺結核を合併しない肺

外結核の場合、特に骨関節結核（結核性脊椎炎を含む）、腹部リンパ節結核では、検体の確保に侵襲的な検査が必要不可欠だが、その検体採取自体が困難な例にもしばしば遭遇する。このような実臨床における診断上の問題を受けて、最近では、不明熱患者の結核症スクリーニングにおいて、インターフェロン γ 遊離試験（IGRA）が有効であるとの研究結果が示されている。脊椎病変が結核性脊椎炎である可能性を否定できない場合にも、IGRA検査が鑑別診断に有効との報告がある。結核を疑うが、適切な検体確保が困難な症例においては、T-SPOTやクオンティフェロン（QFT）検査を積極的に考慮するべきである（特にベースのIGRA陽性率の低い若年日本人で有用である）。

中枢神経結核においては、結核菌が血行性に髄膜や脳実質に播種して病巣を形成し、粟粒結核に伴う例が多い。中枢神経結核の確定診断時点で、意識障害・複数の脳神経麻痺を呈する場合の予後は6-7割と言われている。抗結核薬で加療した場合の転帰は、治癒、後遺症をともなって回復、死亡、それぞれ1/3程度との報告もあり、早期の治療開始が極めて重要である。中枢神経結核を疑った時点で結核治療を開始することが望ましい。症状としては、不明熱の経過最中に頭痛やめまいを認め、遷延的に意識障害が出現することが多いようである。特に、晚期まん延型で発症する高齢者の粟粒結核に伴う中枢神経結核では、人工呼吸器管理に至る例、死亡転帰が多い印象である。最近では、外国出身の若年患者が来日後、早期まん延型の粟粒結核に付随した中枢神経結核を発症するケースにも遭遇する。加療しても、後遺症により日本での就学・就労が困難となり帰国せざるをえない例を実際に目の当たりにする。診断及び治療開始の遅れに起因した予後不良例とも言え、日本国内での結核まん延を防ぐ目的でも、結核まん延国出身者については積極的に結核を疑う必

要がある。先述したように、IGRA検査や、腰椎穿刺による髄液検体の確保を積極的に試みることが必要である。

肺外結核の治療は、日本結核病学会治療委員会から出されている「結核医療の基準の改訂-2018年」に基づいて行われる。まず、初期の2か月間はINH、RFP、PZA、EBによる4剤を併用した治療を行う。次の維持期にはINH、RFPの2剤を4か月継続するという計6か月治療がスタンダードである。しかしながら、粟粒結核や中枢神経結核（結核性髄膜炎や脳結核腫）などの重症結核、骨関節結核で病巣の感染所見が遷延している場合においては、維持期の2剤併用期間を3か月延長し計9か月の治療となる。このレジメンは国によって異なり、例えばイギリスでは、中枢神経結核の場合、INH、RFPの2剤併用期間は10か月となり、計12か月治療が推奨されている。

また、肺外結核においては、膿胸におけるドレナージのほかにも、診断および治療のために、外科的アプローチが必要となる症例にしばしば遭遇する。例えば、頸部リンパ節結核において頸部リンパ節が膿瘍化・瘻孔を形成しドレナージを行う場合、腸結核による腸管狭窄からイレウス・穿孔をきたした場合、結核性脊椎炎による脊髄の圧迫、あるいは腸腰筋膿瘍を形成した場合などが挙げられる。これらにおいては、呼吸器外科、頭頸部外科・消化器外科、整形外科や放射線科など、関連各科による協力体制も欠かせない。

肺外結核の感染経路、診断及び治療上の留意点について述べた。患者QOLの向上、わが国における結核のまん延を防ぐためにも、早期診断・早期の治療開始が重要である。

第9回抗酸菌研究会をふりかえって

第9回抗酸菌研究会

大会長 和田 崇之^{1,2}

¹大阪公立大学大学院生活科学研究科微生物学教室

²大阪公立大学大阪国際感染症研究センター

2025年10月18日～19日の2日間にかけて、「第9回抗酸菌研究会」が大阪公立大学（杉本キャンパス）にて開催されました。本年度は私が大会長の役を仰せつかり、準備および当日の運営を担当いたしました。本研究会は、結核菌をはじめとする抗酸菌を対象とした研究を軸として、基礎から臨床にわたる多様な専門家が集い、知見を共有し、学術的対話を深める場として、これまで10年にわたり開催されてきました。本会は、扱いづらさのある抗酸菌を対象とした研究者同士が横のつながりを保ち、特に若手研究者の支援と活性化を目的としています。こうした理念が初期の頃から継続されながら、自分の番として大役を拝受して無事終了できることには、当初より運営に携わってきた者として、大変感慨深いものがあります。ここに、発表に臨んでくださった皆さま、さらに、発表を後押ししてくださった指導教員・シニア研究者の方々に、心より御礼申し上げます。

抗酸菌研究の未来に向けて

抗酸菌は、性質的にも技術的にも研究の難易度が高く、専門性の高さゆえに、広い分野を扱う学会では埋もれてしまいがちなテーマです。また、大規模な研究集会である日本結核・非結核抗酸菌症学会は、臨床医の先生方によるご報告が中心となり、基礎研究が前面に出る機会は限られています。そのような中で、本研究会の存在意義はそのニッチを形成することにあり、「若手研究者が中心となる発表と議論の場を」という理念が、回を重ねるごとに明確な形となって表れてきたようにも感じます。まずは、若手研究者が中心となって発表し、フラットに議論できる場であること。そこに、シニア研究者のアドバイスや臨床で活躍しておられる先生方の気づき、着想、現場の事情などが提供される土壤が形成されれば、新しい研究課題や、より機動性の高い学術連携を生み出す土台として機能するの

ではないか、と考えています。

今大会では、全20題の口頭発表が行われました。そのうち7題が大学院生による発表、うち4題は修士課程の学生によるものでした。さらに、その中から3名が奨励賞を受賞するに至ったことは、本年の研究会で特筆すべきことであったと思います。いずれの発表も、研究の着眼点、実験・解析の構成力、プレゼンテーション能力、考察の深度に優れ、若手研究者による今後の展開に大きな期待を抱かせる内容でした。学生として抗酸菌研究に携わる経験を経た彼らが、今後どのようなキャリアパスの中で研究に関わり、どのように道を切り拓いていくのか。その姿を想像することは、本会の今後を考える上でも大きな励みとなるように思います。

学際性と発展性に富んだ発表内容

今年度の発表内容は、例年以上に学際性に富んだ構成となりました（表参照）。抗酸菌研究という軸を持ちながらも、公衆衛生、免疫学、創薬、化学合成、ゲノミクス、バイオインフォマティクス、国際保健といった幅広い領域が扱われ、抗酸菌という研究課題が持つ「奥行き」を再認識させられたものでした。

表 第9回抗酸菌研究会における発表演題の研究分野*とその演題数

創薬・薬剤研究	5 件
基礎研究（細菌学・分子生物学）	4 件
免疫・ワクチン	4 件
診断・検出	3 件
ゲノミクス・バイオインフォマティクス	2 件
公衆衛生・疫学	2 件
国際保健	1 件

* 発表タイトルから、Claude 3 Opus 40 によってできる限り最小数の研究分野に分類するよう検討させたもの。

本会は例年通りの試みとして、発表者に可能な限り長い発表時間を確保するスケジュール構成といたしました。しかし、今大会は分野の幅が広がったことで、質疑応答の時間がやや不足気味になってしまった面も否めません。今後は、柔軟な時間配分の検討や、全体討論の導入も視野に入れ、より双方向的な学びの場となるよう工夫を重ねていくことも必要となっていくかもしれません。

特別講演：新たな遺伝暗号概念の可能性

本年の特別講演では、岡山大学学術研究院の茶谷悠平氏をお招きし、「翻訳停滞」、いわゆる難翻訳アミノ酸配列がもたらす新知見に関するご講演をいただきました。通常の遺伝子配列や転写制御とは異なる視点として、翻訳過程において出現するタンパク質合成の滞留・遺伝子コードのスキップ現象は新規性が高く、抗

酸菌に特有の緩慢な分裂増殖や休眠状態とも深く関わる可能性を示唆する内容でした。いわば「DNA配列に潜む間接的な遺伝情報」に光を当てるご研究内容は、参加者の知的好奇心を大いに刺激し、会場全体に熱気が広がりました。本会では、抗酸菌に直接関係しない内容であっても、普遍性の高い学術的知見をお話いただけの方にご講演いただくことが恒例的になっており、そのスタンスは本会の大きな魅力の一つであると感じています。

今後への期待と課題

今回の開催を通して、改めて強く意識されたのは、臨床現場との接点をより多く持つ必要性です。とくに非結核性抗酸菌症の拡大が進む中で、臨床、公衆衛生の重要性はますます高まっています。こうした現実を踏まえ、基礎研究と臨床現場との連携をどう橋渡しす



(左上)研究会での質疑の様子。(右上)情報交換会の様子。(左下)茶谷氏による特別講演。(右下)奨励賞受賞式。右から、鎌田菜々美氏(阪大)、井上陽晴氏(大公大)、Louie Rince C. Suyo氏(阪大)、澤井宏太郎氏(藤田医大)、山口雄大氏(感染研)は不在)

るかが、今後の研究会のひとつの鍵となるでしょう。今回、臨床医の先生方からのご参加が例年に比べて少なかったことは、私自身の運営上の至らなさと受け止めています。症例報告や現場の観察に基づいた着想が新たな研究につながるような「循環」を作るために、参加のしやすさ、告知の工夫、テーマ設定の柔軟性など、さまざまな改善の余地があると反省しています。

結びにかえて

本研究会が、若手の抗酸菌研究者にとって「最初の登壇の場」となり、その挑戦を評価される空間であり続けることを願ってやみません。これまで多くの先人が築き上げてきた研究基盤を継承し、次世代の研究者候補を支えることが、ひいては日本全体の感染症研究の厚みを増すことにもつながっていくと信じています。

本会を開催するにあたり、共催として多くのご支援をくださった国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）ならびに日米医学協力計画・抗酸菌症専門部会に、この場を借りて御礼申し上げます。とりわけ、

第1回から継続いただいている「日米合同会議」への推薦枠は、本会の存在意義を高めるものとして、大きな意味を持っていると感じます。この枠組みによって、本研究会が若手研究者にとってひとつの登竜門として機能していることを改めて実感しております。

本会の運営にあたり、幾度となくオンラインミーティングにてアドバイスをくださった阿戸学会長、運営委員のみなさま、ならびに開催の支えとなってくれている理事の先生方に厚く御礼を申し上げます。特に前回・前々回大会長をご経験された瀬戸真太郎様、港雄介様には多大なるサポートをいただきました。また、前日・当日の準備・雑務を陰ながら支えてくださった瀬戸順次様、田丸亜貴様、山本香織様、井上陽晴様にも感謝申し上げます。

なお、第10回研究会は、記念すべき節目の大会として、琉球大学の梅村正幸先生を大会長に迎え、沖縄にて開催される予定です。ますます充実した会となることを期待しつつ、本稿の結びとさせていただきます。



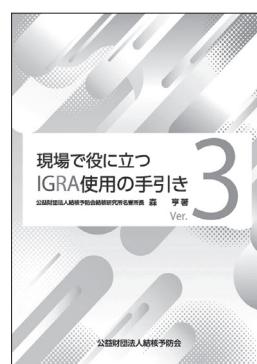
結核予防会の書籍



保健師・看護師の結核展望 125 号
B5 判 / 112 頁 2,750 円



結核の統計 2025
A4 判 / 128 頁 3,850 円



現場で役に立つ IGRA
使用の手引き Ver.3
A4 判 / 75 頁 1,980 円

購入は
JFPA オンラインショップから
“結核”で検索



お問合せ先

一般社団法人日本家族計画協会
(JFPA)
電話番号 : 03-6407-8971

第77回結核予防全国大会開催要領

1 名 称 第77回結核予防全国大会
テーマ 昭和100年の歩み、愛媛から未来へ～正岡子規の精神を踏襲～

2 概 要 結核予防全国大会は、全国の結核予防関係者が一堂に会し、結核対策の将来に向けての方針や対策推進の諸方策など、当面する結核の諸問題について討議する場です。結核は、国内では減少傾向にあるものの、途上国等では今なお深刻な感染症の一つとなっています。
大会を通じて国民の結核への関心を高め、また、討議された重要な事項については大会の名のもとに決議し、国及び地方公共団体等関係方面に実施方策について要望します。結核関係者にとって最も重要で大きな大会です。
結核予防会総裁として当初は秩父宮妃殿下に、また平成7年からは秋篠宮皇嗣妃殿下にご臨席いただき、ねぎらいと励ましのおことばを賜ります。また、結核予防事業に対する功績が顕著な方々に秩父宮妃記念結核予防功労賞を授与いただきます。
愛媛県におきましては、昭和39年の第15回大会に次いで、令和8年3月に第77回大会を松山市で開催することになりました。

3 主 催 愛媛県、結核予防会、愛媛県総合保健協会

4 共 催 厚生労働省

5 特別後援 松山市

6 後 援 外務省、日本医師会、日本看護協会、全国結核予防婦人団体連絡協議会、健康・体力づくり事業財団、日本対がん協会、予防医学事業中央会、ストップ結核パートナーシップ日本、愛媛県結核予防連合婦人会、愛媛県教育委員会、松山市教育委員会、愛媛県市長会、愛媛県町村会、愛媛県医師会、愛媛県歯科医師会、愛媛県薬剤師会、日本赤十字社愛媛県支部、愛媛県看護協会、愛媛県診療放射線技師会、愛媛県臨床検査技師会、愛媛県栄養士会、愛媛県社会福祉協議会、愛媛県食生活改善推進連絡協議会

7 期 日 令和8年3月17日（火）～3月18日（水）

8 会 場 ANAクラウンプラザホテル松山（〒790-8520 愛媛県松山市一番町3丁目2-1）

9 日 程 ※会場・所要時間は変更となる可能性があります。
【第1日】令和8年3月17日（火）
 (1) 結核予防会全国支部長会議 14:00～15:30
 (2) 全国結核予防婦人団体連絡協議会懇談会 14:40～15:30
 (3) 全国結核予防婦人団体連絡協議会写真撮影 15:40～15:45
 (4) 研鑽集会 16:00～17:30
 (5) 大会歓迎レセプション 18:30～20:00
 【第2日】令和8年3月18日（水）
 (1) 秩父宮妃記念結核予防功労賞受賞者写真撮影 09:30～09:35
 (2) 大会式典・議事 10:00～11:00
 (3) 支部長午餐会 11:10～11:45
 (4) 全国結核予防婦人団体連絡協議会定期社員総会 11:05～12:05
 (5) 全国結核予防婦人団体連絡協議会第2回理事会 12:10～12:55

「複十字」掲載主要論文・記事一覧

No.420 (1月号) ~No.425 (11月号) / 2025年

◆国内結核事情及び対策の動き

・結核・呼吸器感染症予防週間

結核・呼吸器感染症予防週間に当たって 木庭愛 No.424 9月 P1
結核・呼吸器感染症予防週間に寄せて 加藤誠也 No.424 9月 P2
結核の統計 2025を読む 鵜飼友彦 No.424 9月 P3
結核をグラフで見てみよう(1)~(3) No.424 9月 P7
令和7年度結核・呼吸器感染症予防週間実施予定行事(複十字シール運動
キャンペーン) No.424 9月 P10
令和7年度「結核・呼吸器感染症予防週間」の実施について No.424 9月 P16
結核・呼吸器感染症予防週間イベントのお知らせ No.424 9月 表3
結核・呼吸器感染症予防週間広報資料のご案内 No.424 9月 表3

・結核・呼吸器感染症予防週間活動報告

支部・本部活動報告 No.425 11月 P4
令和7年度結核・呼吸器感染症予防週間レポート No.425 11月 P9
令和7年度結核・呼吸器感染症予防週間ライトアップ No.425 11月 P17
結核・呼吸器感染症予防週間 結核予防会(本部)実行事
No.425 11月 表4

・STBJが結核・呼吸器感染症予防週間記者発表を実施 No.425 11月 P31

◆結核予防会関連行事・事業

・第76回結核予防全国大会
第28回秩父宮妃記念結核予防功労賞受賞者のご紹介 No.420 1月 P4
2024(令和6)年度第76回結核予防全国大会研鑽集会「高齢者・超高齢者
および外国人の結核対策 -in Ihatov-」 加藤誠也 No.420 1月 P6
第76回結核予防全国大会開催要領 No.420 1月 表4

・第32回結核予防及び胸部疾患日中友好交流会議参加報告
児玉達哉 No.420 1月 P12

・第76回結核予防全国大会報告
第76回結核予防全国大会を顧みて 本間博 No.421 3月 P2
第76回結核予防全国大会研鑽集会報告-高齢者・超高齢者および
外国人の結核対策 -in Ihatov- 慶長直人 No.421 3月 P4
第76回結核予防全国大会決議文 No.421 3月 P5
岩手県知事挨拶・厚生労働大臣祝辞・日本医師会長祝辞・
全国結核予防婦人団体連絡協議会長祝辞 No.421 3月 P5
第76回結核予防全国大会開催模様 No.421 3月 表2

・持続可能な結核対策とは—第29回国際結核セミナーに参加して
康筋瑛 No.422 5月 P2

・令和6年度結核対策推進会議に参加して 塚本加奈子 No.422 5月 P3

・第29回結核予防関係婦人団体中央講習会開催 No.422 5月 P17

・ネパール結核対策スタディツアー参加者募集 No.422 5月 表4

・第100回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会
第100回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会に参加して
鵜飼友彦 No.424 9月 P20

結核予防会発表課題一覧 No.424 9月 P21

・令和7年度結核予防技術者地区別講習会実施報告
八十島忍・千葉りか・佐藤友香・上川莉穂・大槻咲瑛・若井直美・高川茉里奈
No.425 11月 P25

◆世界の結核事業と結核対策の動き

・国際結核肺疾患予防連合主催「第55回肺の健康世界会議2024」の
参加報告 鵜飼友彦 No.420 1月 P8

◆結核対策活動紹介

・鹿児島県大隅地区における外国人技能実習生の結核対策に係る取組みについて
片野坂有香・井無田萌・本白水翔太・増田直美・
蓑田祥子・奥幸代・宮園君子・松岡洋一郎
No.420 1月 P14

・鹿児島県出水保健所管内の外国出生結核患者に対する支援とその課題
山元美和・高倉由樹子・瀬戸美里・中迎賢介・中村公美・岩松洋一
No.421 3月 P10

・技能実習生受け入れ企業の不安解消に向けた支援
澤田虹歩 No.422 5月 P4

・群馬県結核診療支援相談センターについて 江口奈々 No.423 7月 P4

・非結核性抗酸菌症患者の支援体制構築における薬剤師の役割
佐藤可奈 No.424 9月 P22

・大分県北部保健所管内の事業所との連携による外国出生結核患者への
結核対策 伊藤彩夏・石原沙津季・阿南恵理香・内田弘子・小野重遠
No.425 11月 P28

◆教育の頁

・第99回日本結核・非結核性抗酸菌症学会会長特別企画1
結核 痘める人の視点—結核病学会百周年を記念して—(その2)
工藤翔二 No.420 1月 P16

・メタボリックシンドロームの生い立ちとこれから 宮崎滋 No.421 3月 P7

・入国前結核スクリーニングが始まりました 大角晃弘 No.422 5月 P6

・結核低まん延国であるドイツ・オランダの視察報告 高橋千香 No.423 7月 P6

・結核とステigma 竹下啓 No.424 9月 P24

・薬剤耐性遺伝子検査—結核治療の改善と患者負担の軽減— 吉山崇 No.425 11月 P30

◆ずいひつ

・さらば愛しき予防会 羽入直方 No.420 1月 P7

・長期結核研修の宝物 木添茂子 No.421 3月 P22

・結核は保健師活動の原点:望月弘子先生から教わったこと 村嶋幸代 No.422 5月 P12

◆シリーズ世界の結核事情

・(47)「WHOグローバルTBLレポート2024」について 平野有希子 No.420 1月 P18

・(48)結核治療を最適化する抗原検査の開発 竹内力矢 No.421 3月 P12

・(49)初めてモンゴルを訪問して—モンゴルの結核事情 岡田耕輔 No.422 5月 P8

・(50)結核対策における新技術導入 加藤誠也 No.423 7月 P8

・(51)—第100回日本結核・非結核性抗酸菌症学会学術講演会 シンポジウムを振り返って— 永田由佳 No.424 9月 P26

・(52)ザンビアへの議員視察 河野洋 No.425 11月 P34

◆シリーズ世界の結核研究の動向

・(44)播種性非結核性抗酸菌症と抗IFN-γ中和自己抗体 坂上拓郎 No.420 1月 P20

・(45)TBScience2024(1):新規ワクチン動向など 慶長直人 No.421 3月 P14

・(46)TBScience2024(2):短期治療の流れを受けて 慶長直人 No.422 5月 P10

・(47)日米医学協力計画60周年に因む日米医学協力計画・ 抗酸菌症(専門)部会とその活動 松本壯吉 No.423 7月 P10

- ・(48) 結核に潜む非結核性抗酸菌症—世界的な動向と同定への取り組みについて 松本悠希・中村昇太 No.424 9月 P28
- ・(49) シングルセルRNAシークエンス法による結核肉芽腫の解析 濱戸真太郎 No.425 11月 P32

◆TBアーカイブだより

- ・結核予防会の枠を超えて、情報を広く発信する方向へ 第17回TBアーカイブ委員会報告 石川信克 No.420 1月 P22
- ・結核を科学しましょう—療養雑誌『保健同人』の誕生とその歩みを追って一 青木純一 No.423 7月 P12

◆結核予防会本部・事業所・支部から

- ・第83回日本公衆衛生学会総会・自由集会 第83回日本公衆衛生学会総会に参加して 村松司 No.420 1月 P10
「結核集団発生の対策に関する自由集会」に参加して 齋藤貴史 No.420 1月 P11
- ・第39回(令和6年度)結核予防会事務職員セミナー報告 生成AIはあなたのパートナー 羽野健汰 No.420 1月 P23
- ・清田明宏医師、第31回読売国際協力賞受賞 No.420 1月 P24
- ・～世界結核デー記念～国際結核セミナー・令和6年度結核対策推進会議 (お知らせ) No.420 1月 P25
- ・「火災予防業務協力功労」を受賞 No.420 1月 P28
- ・第27回秩父宮妃記念結核予防功労賞世界賞授賞式 No.420 1月 表2
- ・2024年沖縄県結核予防婦人連絡協議会と沖縄県の活動 No.420 1月 表3
- ・結核予防会海外事務所からHappy New Year 2025 No.420 1月 表3
- ・第13回日本公衆衛生看護学会(ウイング愛知) 座間智子 No.421 3月 P15
- ・胸部画像精度管理研究会に参加して 佐藤昌弘 No.421 3月 P18
- ・基礎と実践から学ぶ「呼吸器画像診断の会」第7回セミナーを終えて 黒崎敦子 No.421 3月 P20
- ・JATA災害時支援協力者研修参加報告 岩崎崇 No.421 3月 P21
- ・令和6年度ブロック会議開催 No.421 3月 P24
- ・世界結核デー2025テーマは 「Yes! We Can End TB : Commit, Invest, Deliver.」 No.422 5月 P11
- ・「加熱式たばこ」は本当に安心?禁煙に役立つかを調べた研究結果 鵜飼友彦 No.422 5月 P13
- ・日本対がん協会・結核予防会共催 令和6年度診療放射線技師研修会に 参加して 中村千恵・小林喜子 No.422 5月 P14
- ・ミャンマー国地震災害義援金ご協力のお願い No.422 5月 P15
- ・結核研究所が開催する国内研修・講習会のご案内 No.422 5月 P16
- ・令和7年(第40回)結核研究奨励賞受賞者紹介 No.422 5月 P17
- ・令和6年度結核予防会全国支部事務局長研修会並びに全国支部事務連絡会議 No.422 5月 P18
- ・第14回本部・総合健診推進センター合同業績発表会開催 No.422 5月 P18
- ・博物館明治村が60周年を迎ました 永田容子・光野利枝子 No.422 5月 P19
- ・富山県支部に胃胸部併用検診車(宝くじ号)導入 No.422 5月 表4
- ・X(旧Twitter)はじめました No.422 5月 表4
- ・世界NTMデーと世界気管支拡張症デー肺の健康に目に向ける二つの大切な日 森本耕三 No.423 7月 P2
- ・禁煙ポスターのご案内 No.423 7月 P9
- ・ミャンマー地震災害義援金のご報告とお礼 No.423 7月 P16

- ・兵庫県支部に胸部エックス線デジタル検診車(宝くじ号)導入 No.423 7月 表3

- ・ストップ結核パートナーシップと相互連携協定を締結 No.424 9月 P30

- ・予告1「清瀬結核サミット」、11月28日に開催 石川信克 No.424 9月 P31

- ・清瀬ひまわりフェスティバルで募金活動 No.424 9月 P32

- ・予告2 Kiyose TB Summit 2025 清瀬結核サミットの開催迫る No.425 11月 P3

- ・ミャンマー地震災害義援金のご報告 No.425 11月 表3

- ・ネパールへ小児結核薬を寄贈しました No.425 11月 表3

- ・清瀬結核サミット予告ポスター No.425 11月 表3

- ・2025年9月25日からInstagramはじめました No.425 11月 表3

- ・支部長だより 支部長就任のご挨拶 志田正典 No.420 1月 P24

- ・支部長就任のご挨拶 間中英夫 No.421 3月 P19

- ・支部長就任のご挨拶 牧角寛郎 No.422 5月 P15

- ・支部長就任のご挨拶 山下輝夫 No.424 9月 P30

◆複十字シール運動

- ・複十字シールコンテスト結核予防会2位入賞 No.420 1月 表2

- ・令和6年度第2回複十字シール運動担当者会議 鎌田春香 No.421 3月 P23

- ・東京六本木ロータリークラブ様よりご寄附をいただきました No.421 3月 表3

- ・複十字シール募金のさまざまな方法をご紹介します No.421 3月 表4

- ・令和7年度複十字シール テーマ:日本の昔話 No.422 5月 表1

- ・2024年度複十字シール運動報告 杉木則子 No.423 7月 P14

- ・令和7年度高額寄附者からのメッセージ No.423 7月 表3

- ・結核をなくすために出来ること～飲んで、設置して社会貢献～ No.423 7月 表4

- ・令和7年度都道府県知事表敬訪問報告 No.424 9月 P17

- ・毎月定額募金(マンスリー募金)のご案内 No.424 9月 P32

- ・複十字シール運動厚生労働大臣表敬訪問 No.425 11月 P1

- ・令和7年度第1回複十字シール運動担当者オンライン会議 杉木則子 No.425 11月 P2

- ・令和7年度都道府県知事表敬訪問報告(続報) No.425 11月 P21

◆巻頭メッセージ

- ・第76回結核予防全国大会を迎えて 達増拓也 No.420 1月 P1

- ・年頭のご挨拶 尾身茂 No.420 1月 P2

- ・年頭のご挨拶 本間博 No.420 1月 P3

- ・令和7年新春にあたって 館澤敏子 No.420 1月 P3

- ・令和7年新春にあたって 飯田晃 No.420 1月 P3

- ・平和と健康:四分の一に減ったカンボジアの結核世界結核デーにあたって 小野崎郁史 No.421 3月 P1

- ・結核予防会における健診のあり方 工藤翔二 No.422 5月 P1

- ・評議員就任に当たって 笹本洋一 No.423 7月 P1

◆思い出の人を偲んで

- ・岩井和郎先生の想い出 河端美則 No.421 3月 P16

- ・岩井和郎先生の想い出 山田博之 No.421 3月 P17

◆その他

- ・役員人事 No.423 7月 P16

多額のご寄附をくださった方々

《指定寄附等》(敬称略)

プラス株式会社

《複十字シール募金》(敬称略)

本部 (令和7年度ご寄附分) — (団体) 成覚寺, 三鷹光器, 安養寺, 京王言語学院, 太陽企画, 光西寺, 在原一憲税理士事務所, ファミリート日の出, 清水眼科医院, 千葉医院, 本淨寺, すみれ, 三共社, 天王寺, 常樂寺, サンコスモ, 桐朋学園, 大井警察犬訓練所, 秋鹿クリニック, 東村山診療所, 水谷医院, 行政書士増田雅久事務所, 山本隆幸法律事務所, シルバーネットワーク, サコーデュ国分寺, 寧波旅日同郷会, 世界聖典普及協会, 総持寺, レニア会, ヨシダ消毒, 芸術による教育の会, 時の鐘法律事務所, ナカザワ, 熊谷防災メンテナンス, 黒田内科クリニック, 小室クリニック, ペンタ保険サービス, 多摩あおば病院, 中島不動産, みその商事, 神田製作所, 延命寺, ライセンスアカデミー, 宝光寺, イトヤ食品, 町田商事, 秩父神社, 玉川すばる, 日高医師会, 多摩病院, イツエ・エレクトロ, 大宮整形外科, 源正寺太子堂, 田鷹鉄工, わかば春日部, ペエックス, らいん薬局, 伊藤内科, 東京青梅病院, 福榮会, 海晏寺, けいひんファミリークリニック, はしもと内科クリニック, 富士経済グループ本社, 産経商事, 勇心商事, 官庁通信社, 盛伸社, 加茂建設, 保谷厚生病院, 梅田会計事務所, 徳榮商事, 浅井商事, 吉田医院, 岩崎倉庫, 江北商事, 真覚寺, 東京都同胞援護会事業局, 有機合成薬品工業, 医薬品出版, タカムラ, エルフォー企画, 岡本建設, KT多摩精機, うつみ内科クリニック, アイデープロジェクト, 霞会館, 原歯科クリニック, 成美堂出版, 日本缶詰びん詰レトルト食品協会, 清国寺, 厚生労働統計協会, 近畿労働金庫有田支店, will, 国精工業, 日本大学本部総務課, 園田学園女子大学庶務課, 森商店, 行政書士隅田川法務事務所

(個人) 吉田万里子, 松本淳一郎, 斎藤元泰, 名取誠二, 河上牧夫, 島尾真, 可児長英,

船橋保治, 多田泰子, 根岸綾枝, 中島俊典, 大平明, 土田修, 清水嘉与子, 布施木昭, 須知雅史, 渡辺一衛, 北川彌生, 入村哲也, 明石光弘, 山岡建夫, 河津秋敏, 近喰ふじ子, 村井温, 松村芳朗, 大橋洸太郎, 増田剛太, イノウエケイコ, 有山猛生, 上田光, 小俣宗昭, 飯田和道, 辻田元子, 雨倉敏廣, 藤澤好子, 平山茂博, 鈴木崇二, 亀田龍樹, 須田清, 平井時夫, 占部浩一, 木村睦子, 長谷川真一, 浅野楳悦, 中川勝, 佐藤奈津江, 遠山和大, 出村昌子, 大澤克也, 大島義和, 河野幸正, 村島善也, 黒井朝久, 岩間淑子, 増野伴子, 円山孝, 梅里悦康, 詫間潤, 黒澤一, 田中耕三郎, 平沢久男, 阿彦忠之, 高橋伸介, 守屋俊晴, 中島由紀, 高橋紀久雄, 高木文昭, 渡辺政和, 本多紀一, 西本久美子, 辻至, 田中喜文, 高山直秀, 蓮沼文雄, 中谷律子, 田中雅史, 岡田晋吉, ハラダコウキ, 若槻康二, 玉木英明, 村山千香子, 岩田達明, 千家尊祐, 加藤誠也, 関崎三郎, 小柴恭男, 笹野武則, 鎌田直子, 吉野賢治, 本田憲業, 大山阜仁子, 長澤紘一, 竹下景子, 杉浦好朗, 関堂勝幸, 徳川好子, 小林典子, 城所恵子, 永井洋子, 今井清兼, 壱生基博, 秋山孝之, 横田陽子, 宮崎祐, 町田武久, 高田滋, 今井均, 高山明雄, 大熊竹男, 勝本慶一郎, 矢野政顕, 山内由利子, 田村恵津枝, 木曾マス, 斎藤英子, 松村正一, 大根川總子, 益子眞一朗, 斎原好恵, 田村一美, 間野チイ, 麻瀧和子, 藤原大輔, 水上陽介, 松岡秀枝, 北澤竜二, 福田光, 大野美佐子, 諸岡真弓, 武藤良知, 尾形早苗, 高瀬淳, 島村元治, 古屋文男, 耀英一, 矢島祐治, 下村典正, 村野猛, 松谷雅生, 越田晃, 栗本涼, 坂井仁美, 柴野悠樹, 吉田真理子, 堀江英親, 大西誠

福井県 (団体) 眼科原医院, むかい心療内科クリニック, 本多レディースクリニック, 伊部病院, 中村病院, 福井愛育病院, 今立中央病院, 福井県済生会病院, 打波外科胃腸科医院, 藤田医院, 福仁会病院, あわら市職員組合, 林病院, 小浜医師会, 東洋紳敦賀事業所, 福井赤十字病院, 笠原病院

三重県 (団体) いなべ総合病院, 四日市医師会, 山中胃腸科病院, 主体会病院, 大門病院, 東海眼科, 伊勢地区医師会, 伊賀医師会, JAグループ三重, 山岸労務経営管理事務所, ワキタ商会, 松阪電子計算センター, 百五リース, トヨタ産業, 三重県歯科医師会, 三重県医師会, 栄屋理化, 河村産業, 特別養護老人ホーム青松園

京都府 (団体) 優和京都本部, 観音寺, 京都府歯科医師会, 田中長良良漬店, 広野保育所, 京都市地域女性連合会 (個人) 近藤由紀勇, 西村仁美, 奥田桂子, 川勝康行, 中井克是, 山口務, 井上正治, 市川寛, 萩尾麻美, 水野雅之, 村田元, 高木伸夫

大阪府 (団体) 共立物流システム, ピージーエム, 小林製薬中央研究所, 竹内化学, 竹中工務店, アイネックス, 星光ビル管理, 大和化銀, 白洋舎, 三共自動車, 松浪硝子工業, イズミ車体製作所, 関西エンジニアリング, 日本医学, 竹中庭園緑化, ポート, 伏見製薬, フエリス, カイゲンファーマ, エルアンドエル, 医療情報システム, 天理教高安大教会, 西脇泰弘税理士事務所, 栗東寺, 日本分析化学専門学校, ミナト医科学, 大阪府八尾市保健所, 大阪府健康医療部 (個人) 増田國次, 岡島建三, 小倉剛, 河面孝子, 辰見宣夫, 森本正, 志村晴信, 石田栄志, 宮崎憲彦, 井上素子, 折井宏, 川崎健二, 岩田信生, 山本和貴, 都築武保, 渡部ヒサ

広島県 (団体) 広島市地域女性団体連絡協議会, 竹広医院, 三次市地域女性団体連絡協議会, 竹原市女性連絡協議会, 北広島町女性会, 浜中皮ふ科クリニック, 新開医院, 森田皮膚科医院, 能宗クリニック, 三永会, 緑雨会, 福山市女性連絡協議会, 東広島市女性連合会 (個人) 澤野文夫, 藤原紀男, 前岡弘子, 河本博明

● お詫びと訂正 ●

本誌 No.425 (2025年11月号) P36「多額のご寄附をくださった方々」において、「三重県」とすべきところを誤って「徳島県」と掲載しておりました。ここに深くお詫びし、訂正いたしますとともに、本号にて改めてご寄附をお寄せいただいた方々のご芳名を紹介させていただきます。

2026年(令和8年)1月15日発行
複十字426号
編集兼発行人 永田容子
発行所 公益財団法人結核予防会
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1-3-12
電話 03(3292)9211(代)
印刷所 株式会社マルニ
〒753-0037 山口県山口市道祖町7-13
電話 083(925)1111(代)
結核予防会ホームページ
URL <https://www.jatahq.org/>

本誌は皆様からお寄せいただいた複十字シール募金の益金により作られています。

令和7年度複十字シールご紹介

複十字シール運動は、結核や肺がんなど、胸の病気をなくすため100年近く続いている世界共通の募金活動です。複十字シールを通じて集められた益金は、研究、健診、普及活動、国際協力事業などの推進に大きく役立っています。皆様のあたたかいご協力を、心よりお願いいたします。

募金方法やお問い合わせ:募金推進課

結核予防会 募金

検索

またはフリーダイヤル: 0120-416864 (平日9:00~17:00)



2025年沖縄県結核予防婦人連絡協議会と沖縄県の活動

複十字シール運動応援ライブイベント

複十字シール運動を応援するライブイベント「ハートフルLOVEロックフェスティバル」が、9月20日にロックの街こと沖縄市（Koza）で開催されました。響き渡るギターと熱いボーカル、客席からの手拍子と歓声が一体となり、会場は大きな活気と温かさに包まれました。

イベントは「結核・呼吸器感染症予防週間」中の取り組みとして、楽しみながら啓発することをテーマに企画されたものです。ステージでは、協力バンドの力強い演奏が続き、来場者からは「音楽を通して予防の大切さを感じることができた」との声が寄せられました。

当日は小さなお子さんからご年配の方まで幅広い年齢層の方が来場し、募金への協力も2万円を超えるご支援が寄せられました。ご厚意は、結核予防の普及啓発と支援活動に活用させていただきます。ご参加、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。🐰



沖縄県庁への表敬訪問

2025年10月2日に沖縄県結核予防婦人連絡協議会と結核予防会で沖縄県庁を表敬訪問しました。結核・呼吸器感染症予防と複十字シール運動、それぞれの現状や一層の普及・対策を行うことを確認し、市町村や保健所関係機関と正しい知識の普及啓発に務めることを認識しました。🐰



結核予防会海外事務所から

Happy
New
Year
2026

明けましておめでとうございます。
ネパールでは4月が新年にあたり、
2083年を迎えます。今年もよろしく
お願ひいたします!

新年あけましておめでとうございます。カンボジアより謹んで新春のお慶びを申し上げます。現在の場所に移転して、ちょうど二年を迎ました。本年は60年に一度の丙午にあたり、稀にみる力強さを持って、カンボジアMDCスタッフとみなさまと共に、前進・飛躍の一年となるよう願っております。オーラン・チュラーン*

*クメール語で「本当にありがとうございます」

明けましておめでとうございます!ザンビア事務所より新年のご挨拶をお届けします。2年以上続く停電の多い環境の中ですが、スタッフ一同、工夫を重ねながら前向きに活動を続けています。今年は3年間の事業の最終年。事業終了後も現地の人たちが活動を継続できるよう、しっかり引き継ぎを進めていきたいと思います。残りの期間、頼もしい仲間とともに最後まで駆け抜けます!本年もどうぞよろしくお願いいたします。

ネパール事務所・JANTRA



カンボジア事務所



ザンビア事務所



WEB
開催

～世界結核デー記念～ 国際結核セミナー 結核予防と医療における新技術

日時：令和8年3月5日(木)13:30～17:00(予定)

本セミナーでは、結核予防と医療における新技術と題して、世界保健機関HIV・結核・性感染症部のDenis Falzon先生にご講演いただきます。

後半のワークショップでは、国内の各分野の先生方に結核対策における新技術とその普及について、ご議論頂く予定です。

【特別講演】

New technology for tuberculosis prevention and care(予定)

Dr. Dr Denis Falzon, Department for HIV, TB, Hepatitis
and Sexually Transmitted Infections, WHO



WEB
開催

令和7年度 結核対策推進会議

低まん延下でも侮れない結核対策 ～外国生まれの結核を含めた危機管理～

日時：令和8年3月6日(金)13:30～17:00(予定)

日本は2021年、低まん延国とされる10万人当たり10.0を初めて切りました。一方、外国出生者の結核患者の割合は上昇し、また高齢者施設等において日本人の集団発生も起きています。特に外国出生者では稀あるいは重篤な肺外結核や多剤耐性結核の患者を認め、その対応に難渋するなど、結核対策を取り巻く課題は、むしろ複雑さを増しているように考えられます。本会議では、ワークショップにおいて「低まん延下でも侮れない結核対策」と題し、医療・福祉・行政・関係機関が連携し、取り組む必要のある多面的な結核対策を考えたいと思います。また、前半は、今後の予防指針の方向性から結核対策の論点を確認していきます。

*詳細・お申し込みは、結核研究所ホームページをご確認ください。